

## 夫を殺された妻の涙

夫を失っても人前では泣かないようにしてきた。

涙腺が緩みそうなきときは、黒いサングラスをかけた。

その彼女の瞳から涙がこぼれた。この日はサングラスをしていなかった。

二〇一三年十月四日、ロンドン中心部ストランド地区にある高等法院（イングランド高等裁判所）前でマリーナはジャーナリストに囲まれていた。昼を過ぎるころから日が差し、気温は二十度を超えている。

事件の半年後に開いた記者会見で泣いて以来六年間、人前では封印してきた涙である。感情が抑えられなかった。

「簡単にはあきらめられないんです。夫は誰に殺されたのか。真実を知りたいのです」

アレクサンドル・リトビネンコは二〇〇六年十一月、放射性物質ポロニウム210（以下ポロニウム）の入った緑茶を飲んで死亡した。元FSB中佐だった彼は二〇〇〇年に家族とともに英国に亡命し、プーチン政権を批判していた。FSBはソ連国家保安委員会（KGB）の解体に伴って生まれた秘密情報機関である。

放射性物質の痕跡調査の結果などから、英国の警察・検察はロシア人の男二人が暗殺に関与

したと考え、身柄の引き渡しを求めた。ロシア政府はかたくなに拒否し、訴追のめどは立たなかった。真相究明の前に国家の壁が立ちふさがった。

ただ、マリナーが涙したのは「ロシアの壁」のせいではない。立ちふさがったのは「英国の壁」だった。

英国には検死（死因）審問という制度があり、不審死の原因を公の場で特定する。リトビネンコについても、その手続きがスタートしていた。ただ、審問の目的は死因の究明であり、殺害の背景を知ることとはできない。マリナーは審問の過程でこう思った。

「容疑者の身柄は引き渡されず、訴追は難しい。責任追及が困難なら、せめて事実を解明したい」

そこで政府に求めたのが独立調査委員会の設置だった。審問の検死官も調査委を設置すべきだと主張した。英国には大きな事故や事件、災害が起きた際、大臣の要請に基づき調査委を設置する制度がある。ここで公聴会が開かれ、捜査員を含む当事者が公開の場で発言する。政府の持っている資料の多くが開示され、事実解明に迫る。

リトビネンコは亡命を受け入れてくれた英国政府に感謝していた。息を引き取る三日前には「誇りを持って英国人だと言える」と警察に述べている。家族は事件の前月、英国籍を取得し、「エリザベス女王陛下とその後継者に忠誠を誓います」と宣言した。

英国政府も事件発生当初は事実解明に積極的で、マリーナの意見に耳を傾けてくれた。

それから七年が経過し、国内の政治状況は変わった。労働党政権から保守党を軸とする連立政権が生まれ、事実解明よりもロシアとの経済・貿易を優先するようになった。リトビネンコ殺害に関心を向けず、独立調査委員会の設置を却下していた。ロシア政府の事件への関与が明らかになれば、対口関係にとってマイナスになると考えたためだ。

マリーナは調査委設置を求めて訴訟を起こした。問題はその費用だった。かつてはロシア新興財閥（オリガルヒ）のボリス・ベレゾフスキーが彼女たちを支援していた。頼みの綱だった富豪は約半年前の二〇一三年三月に不審死している。マリーナの弁護団は無報酬で活動せざるを得ない状況になった。

そしてこの日、彼女は法廷で告げられた。訴えが認められなかった場合、約四万ポンドの訴訟費用を支払う義務が生じると。当時の為替レートでは約六百八十万円にもなる。記者団の前で涙がこぼれたのは、悲しかったのではない。自国民の命が奪われているのに、政府自ら事実解明の動きを阻止しようとしている。それが悔しかった。

事実解明を求めて手続きを継続するか、あきらめて取り下げるか。週明け月曜（七日）午後四時までに決断をしなければならぬ。残された時間は三日である。

「お金を払うのは私です。だから決められるのも私だけです。よく考えてみます」  
記者団にこう述べ、高等法院を去ろうとしたとき、彼女は一瞬、私と目を合わせた。少し笑みを浮かべたように見えた。私は確信した。彼女はあきらめない。きっとこの司法手続きを進めるはずだと。